

インド・ラダック地方ヌブラ渓谷で近年確認された 仏教壁画の調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 正垣, 雅子, 末森, 薫, 寺井, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000040

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



インド・ラダック地方ヌブラ渓谷で近年確認された 仏教壁画の調査報告

A Report on Recently Discovered Buddhist Mural Paintings in the Nubra Valley in
Ladakh, India

Masako Shogaki, Kaoru Suemori, Junichi Terai

正垣 雅子¹・末森 薫²・寺井 淳一³

はじめに

インドの北部に位置するラダックは、「関嶺を越えた地」⁴を意味する。その名の通り、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈に挟まれた山岳・高原地帯である。ラダックの多くは標高が3000m以上の高地に位置しており、紫外線が強く、酸素は薄い。インド中央部とラダック南側が山脈で隔てられているため、モンスーンの影響を受けにくい。その年間を通じて降水量は少なく、チベット高原と同じく非常に乾燥した気候である。夏は直射日光が強く日中は30度近くに至るが、夜は10度を下回る。冬は氷点下20度に達する極寒の世界となり、ザンスカール川は凍結して「チャダル」と呼ばれる氷の回廊があらわれる。

筆者らは2022年9月15日から9月26日にかけて、ラダックを訪問し、仏教寺院壁画の調査を実施した。2020年以降、コロナ禍による制限のため海外渡航への忌避感があったが、ワクチン接種を条件にビザの取得と出入国手続きが容易となり、現地調査を計画することができた。無事に調査し問題なく帰国できたことに、これまでとは違う感慨深い気持ちを抱いた。

本学出身の写真家・井上隆雄（1940-2016）は1975年夏と1977年夏に2回、ラダックを来訪して、寺院壁画、風景、人々の情景を撮影した。また、1974年から以後13回にわたり来訪したビルマ（現ミャンマー）ではバガンの仏教寺院壁画などを撮影した。バガンとラダックの寺院壁画撮影と編集は、同時進行的に行われたようで、1978年に『バガンの仏教壁画』⁵（講談社）、『チベット密教壁画』（駸々堂）を相次いで出版している。「井上隆雄写真資料アーカイブ実践」は、井上隆雄が遺した壁画写真に関連するポジフィルムデジタル化およびデータベースの構築⁶、井上隆雄写真を用いた壁画再現等の芸術実践、芸術資源の利活用の可能性について、他領域の研究者と

協働し探求している。今回の調査は、「井上隆雄写真資料アーカイブ実践」⁷の一環として実施した。

ラダックでの調査の準備段階で、近年、ヌブラ渓谷で発見された古い仏教壁画の情報を得た⁸。また、現地協力者 Skarma Gurmet 氏⁹（以後、スカルマ氏）からは、同じヌブラ渓谷にある別寺院にも古い仏教壁画が存在するという情報が提供された。そこで、ラダック仏教寺院壁画調査の一部を、ヌブラ渓谷の壁画調査に充てることにした。「井上隆雄写真資料アーカイブ実践」に関連するラダック仏教寺院壁画報告は別稿で取り上げることとし、本稿ではヌブラ渓谷で近年見つかった仏教壁画の調査結果を報告する。

ヌブラ渓谷について

ラダックのヌブラ渓谷は、現地語で「緑の園（Idum.ra (nub.ra)）」を意味する。ラダックの中心都市レーからビーコン・ハイウェイを通り、標高5606mのカルドン・ラを超えて入域する。1970年代に開通したビーコン・ハイウェイは軍事補給路であり「世界一高い自動車道」として知られている。1994年以降、外国人の通行が許され、隠れ里のようなヌブラ渓谷に訪れる観光客が増えた。ヌブラは、西に隣接するパキスタンに対しての軍事拠点であるため、外国人のヌブラ渓谷の入域には、インナーラインパーミット（ILP）が必要になる。取得はレーで旅行社を通じて取得できる。カルドン・ラの南と北にあるチェックポスト（写真1）でパスポートとILPの照合を受ける。かつて、外国人の入域は、ヌブラ渓谷中心部に限られていたが、2010年にパキスタン国境から10kmしか離れていないトゥルトック村の入域が許されるようになり、インド人も含めた観光客が増加した。カルドン・ラを超えるとヌブラ渓谷の標高は3200m程度まで徐々に下がり、



写真1 カルドン・ラ南チェックポスト

シャヨク川とその支流のヌブラ川流域には平坦で緑豊かな大地が広がる。灰色の細かい砂の砂丘が広がるシャヨク川西部では、キャメルライドなどのアクティビティが盛んである。

ヌブラ溪谷北部はカラコルム峠を経て中国新疆ウイグル自治区と接し、ラダックと東トルキスタンの中継地として栄えてきた。その歴史は、紀元 1000 年以前に遡ると考えられているが当時の記録はない。チベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパの直弟子チャンセム・シェーラブ・サンボらが西チベット地域の布教に訪れ、ラダック、ザンスカール、ヌブラにゲルク派の僧院を建立した。1600 年頃、ラダックがバルティスタンとの戦争で大敗したことによって、ヌブラ溪谷にシーア派イスラム教徒が流入し、仏教とイスラム教が混在することとなった。1834 年には、ヌブラ溪谷のイスラム化を危惧した仏教徒たちによってサムタリン・ゴンパ（リゾン・ゴンパの分院）が建立されるなど、二宗教の混成状況は続いている。第二次大戦後、印パ戦争と印中国境閉鎖によって、ヌブラ溪谷は交易中継地という役割を失うことになる。現在は農業が主要産業であり、対パキスタンのインド軍前線基地となっている¹⁰。

我々がレーを出発した時は曇天であったが、頂上に近づくにつれ降雪し、見る見るうちに一面雪景色となった。雪でスリップする車もあり、峠の道は軍の車両、トラック、一般車、観光客のバイクで渋滞し、通行に時間を要すことになった。軍車両の多さに、この道が軍事補給路であることを実感した。

2. エンサ・ゴンパの壁画

2-1 2021 年に発見された壁画の情報

2021 年、ヌブラ溪谷にあるエンサ・ゴンパの埋葬洞窟にて、制作年代が 8～9 世紀と推定される壁画が発見さ

れた¹¹。電子版の記事に掲載された菩薩像のバストアップ写真は、一見してラダックに残る他の壁画に比べて古い時代のものであることをうかがわせる。根拠は明確には示されていないが、推定されている制作年代が正しければ、古代の岩絵を除いてラダック全域に現存する壁画の最古の例となる。後伝期仏教の立役者である訳経官リンチェン・サンボが建立に関わった上ラダックのニヤルマ廃寺や、スピティ地方のタボ寺などの年代はおおよそ 10～11 世紀である。エンサ・ゴンパで発見された壁画は、ラダックで多くみられる後伝期のチベット密教の仏画表現とは由来が異なると考えられ、ヌブラ溪谷が東トルキスタンとの交易中継地として栄えていたことを示す物的証拠となる可能性もある。

2-2 エンサ・ゴンパ

エンサ・ゴンパは、ヌブラ溪谷において外国人が入域可能な範囲の最北部に所在する。シャヨク川から分かれる支流ヌブラ川に沿って、およそ 30km 北上したところにパナミックという集落があり、エンサはその対岸に位置している。パナミックは、かつては東トルキスタンとの交易中継地として重要な街だったが、今は小さな農村である。パナミックのメインロードの脇、山の中腹にリューマチ等に効く温泉があり、現地の人に人気がある。スカルマ氏の話では、共同浴場といっても日本の温泉のように広い湯船に浸かるものではなく、飲泉やうたせ湯、蒸気にあたる、という場所らしい。パナミックをさらに北上し、ハルガムの橋のふもとで ILP のチェックを受けヌブラ川を渡り、山道をしばらく登るとエンサ・ゴンパ（写真 2）に至る。エンサ・ゴンパから眺める光景は壮大であった（写真 3）。

エンサ・ゴンパは、高僧チャンセム・シェーラブ・サンボが瞑想した場所が後に寺院と伝えられており、創建は 15 世紀前半に遡る¹²。堂宇は、崖に面したドゥカン・サルパ（Durkhang Sarpa）とドゥカン・ヨグマ（Dukhang Yogma）の 2 つ¹³、裏手の山には数多くの仏塔（写真 4）が点在している。この仏塔群のどこかに古い壁画があるのだらうと思った。

2-3 エンサ・ゴンパの堂宇

エンサ・ゴンパに到着し、ドゥカン・サルパの階段を上がり、門をくぐると周囲を建物に囲まれた中庭に出る。門のすぐ左の建物は庫裡、その正面は僧侶の住居と思われる。住持の老僧に訪問の目的を話し、調査の承諾を得た。庫裡の建物と川側の建物の角に開く入口を入った正面には蠟燭や供物を備える部屋がある。入口の右手に続く廊下を進むと、右側に白傘蓋仏母を祀った部屋、左側に勤行堂とその前室がある。その日は法要があるのか、近



写真2 エンサ・ゴンパ遠景



写真3 エンサ・ゴンパから望むヌブラ川



写真4 エンサ・ゴンパ裏山の仏塔群

隣から僧侶が集まっていた。

白傘蓋仏母の大きな塑像が祀られた部屋（写真5）の左壁には窓があり、室内は明るく、ヌブラ川を見下ろす景観が気持ちよい。正壁のガラスケース内の白傘蓋仏母塑像の周りには様々な種類の古いタンカが重なるように掛けられていた。

勤行堂（写真6）とその前室は元々一体ではなく、後に屋根をつけて屋上を前室に改築したような作りであっ



写真5 白傘蓋仏母を祀る部屋



写真6 勤行堂の内観



写真7 勤行堂前室の木彫肘木

た。前室は採光があり明るく、壁画は近代に描かれた中国風の四天王である。前室の中央、柱の根元に括りつけられていた木彫像（写真7）は、下ラダックの名利アルチ・ゴンパ三層堂をはじめラダックの古刹に見られる寺



写真8 アルチ寺三層堂の肘木装飾



写真9 勤行堂前壁の壁画

院建築の肘木装飾部材の獅子と近似する（写真8）。

勤行堂に入ると窓のない閉鎖的な空間で、室内は暗いというより黒いという形容が似合う。床は板張りで黒光りの艶があり、壁、天井は黒い煤や埃に覆われていて、時の重みを感じる。部屋の両側には勤行用の机と座布団が並べられ、儀式用の太鼓（mga）が置かれている。正壁はガラスがはめられた仏龕となっており、本尊は大きなツォンカパ塑像である。仏龕内は、向かって左から四臂観音坐像、十一面千手千眼観音立像、ツォンカパ塑像、裂で包まれた塑像、青色の護法尊塑像が並び、ガラス面にはダライラマ14世の写真が複数祀られている。勤行堂の左右と入口側の壁（前壁）の壁画は、近代に描かれた三十五仏である（写真9）。

勤行堂内で注目されるのは、仏龕内のツォンカパ塑像の後方、一段奥まった空間の壁画（写真10）である。この壁画は、その表現から創建当初の壁画と推定される。前に塑像が林立するため全容を確認することはできないが、尊像の相貌は、丸顔に柳葉のような切れ長の目、寄り目気味の瞳、唇を小さく結ぶといった表情、すりと



写真10 正壁仏龕後方の壁画



写真11 トリン寺紅殿壁画

長い手足は、西チベットのトリン寺に描かれた壁画（写真11）¹⁴と近似する。

壁画表面は随分汚れており不鮮明であるものの勤行堂と隔てるガラスによって、人為的な損傷や、勤行の灯明の油や煤等の付着はある程度は避けられていると思われる。今後の修理作業においては過剰な洗浄、補筆、新しい壁画を描く等の宗教上の善行を優先するのではなく、創建当初の壁画を現状保存する方向で維持されることを望む。

もう一つの堂宇であるドゥカン・ヨグマは、外観二階にバルコニーが設けられた建物である（写真12）。バルコ



写真12 ドukkan・ヨグマの外観



写真14 構造物の内部空間



写真13 石積み of 構造物 (側面)

ニーの木材は新しく、最近修理されたようだ¹⁵。堂内の床は板張り、ガラスがはまった正面仏龕には本尊の如来(裂がかかっており印相確認できず)、ツォンカパなど祖師像三体、向かって左端には仏塔が安置されていた。仏龕にはダライラマ14世、幼少期のパンチェンラマ11世、バクラ・リンポチェなどのゲルク派高僧の写真が祀られていた。堂内の壁画は近年に描かれた諸尊であるが、大きく剥落した欠損や退色が認められた。

2-4 2021年に発見された壁画

ドukkan・サルパの西側に巡らされたフェンスにある扉から裏手の山肌に点在する仏塔群へ行くことができる。藪の中の道を進むと青い看板(矢印とチベット語でAVALOKITSVAR □¹⁶と表記)があり、また少し進むと簡易な屋根と金網で保護された低い基壇のような石積みの構造物(写真13)が見える。この構造物の床面は、地面から一段高くなるようにスレート状の石を積み、泥土で整地されている。床面の上に石と泥土を積み上げてコの字型の壁を作り、天井面は5cm程度の丸太を10数本並べた上に石と泥土で成形している。壁は約30cmの厚みがあ

り、約60～70cm四方の空間を確保している(写真14)。開口部から見ると、正面の壁と向かって右側の壁に、古い壁が厚みの半分を構造物に埋め込むような状態で設置されていた。正面の壁に設置された古い壁は、壁画が確認できる高さが約45cm、幅が約60cm、右側の壁に設置された古い壁は、高さは同じく約45cm、幅は約40cmで、正面の壁と直角に接続している。註11の記事に掲載されていた菩薩像は、右側の壁に描かれたものである。この構造物は、壁画を風雨等から保護するために作られたようだが、壁画の最下部には、地面から上がってくる湿気、カビなどで既に損傷が生じている。また、壁画は、残存する画面より下方に続きがあったと推定される。どのような経緯で現状の構造物が設置されたかは定かではないが、壁画の設置を床面からもう少し高い位置にし、さらに大きな空間を確保する方が壁画の保存にとって適切であろう。

住持からの許可を得て、壁画の撮影をおこなった。金網のフェンスが張られているため、空間の内部には入ることができないため、向かって右の壁面は、一脚の先にカメラを装着し、リモートにて撮影を実施した。また、LiDARカメラを備えるiPadを用いて、空間の三次元データを取得した。三次元データを用いることにより、壁面と正対する画像を得ることができる。

正面の壁には、中央に趺坐仏、その両脇に菩薩が立つ三尊像が描かれている(写真15)。中尊と左脇侍の間には、蓮華のようなものが大きく描写され、空間を埋めている。中尊と右脇侍の間は、剥落が進んでいるため確認できない。

赤みのある肉身で描かれる中尊仏は、偏袒右肩で衣を身につけ、胸前で転法輪印を結び、右足を上にした結跏趺坐で表されている。両脇侍の立ち姿から、中尊は壇または蓮華座に趺坐していたと思われるが、下部が失われているため不明である。肉身には、肉付きを意識した褐



写真 15 正面の壁に描かれた三尊像



写真 17 石積み構造物正面壁・左脇侍菩薩



写真 16 石積み構造物正面壁・右脇侍菩薩

色の隈取りが入れられている。衣の色は、紫色を呈した褐色が認められるが、これは丹の変色と推測する。肩から斜めに垂れる衣の端、左腕から太ももへと垂れる裂の端を、細い白線で、波形に表す形式は珍しい¹⁷。頭光は正円ではなく、肩から上方に向けてややふくらんだ楕円形であり、身光とともに色彩の異なる複数の層と線で彩られている。

右脇侍菩薩は、中尊に顔を向けているが、頭部彩色の剥落、退色が進んでいて、高髻や宝冠、顔の表情は不鮮明である（写真 16）。首飾、臂釧、腕釧、二列の白点で表された細い条帛等で上半身を装飾する。肉身の色は白、輪郭線は黒、右手は、胸前で第一指と第二指を捻じている。

菩薩の左手は、身体の左側において、下から S 字にくねりながら伸びる蓮華の茎を引き寄せ、腰に添えている。蓮華の茎と解される図は、上方が剥落しているおり、華の形や色は不明であるが、菩薩の左肩辺りに茎の膨らみと萼らしき線が確認できる。身につけた裙は、その裂の合わせ目、結び目、裂の端が臍下に描写され、膝上くらいに裂の端と同色の覆輪が確認できる。これより下方の壁画が失われているので、下に続く裙の描写は確認できない。ドーティのような膝上丈の裙という可能性もある。菩薩の体軀は、肩幅のある逆三角形型で、伸びやかな手指が美しい。古典的な三曲法で表された姿態は、チベット仏教後伝期における最初期の仏教壁画の特徴とは全く違う表現である。

左脇侍の姿勢は、基本的に右脇侍と類似する（写真 17）。右脇侍より表現がよく残っており、頭部の高髻、尊容が確認できる。肉身は青黒色、輪郭線は黒で表わされている。切れ長の見開いた目、瞳孔はやや上瞼寄りに点じている。眉は太さが一定の白線、長くゆったりした弧を描く。鼻は小鼻を表し、鼻孔には黒が転じる。鼻梁には両眉が合流する箇所から真直ぐおろしたような白線が微かに入る。眼窩の曲線に添って入れた隈取りで立体感を演出している。唇は薄く引き締まっていて、口角だけが微妙に上がり、沈静な微笑みが印象的である。髪を束ねて三段に巻き上げた高髻は、明確な黒線で髪筋を表している。頭部中央に宝冠が描かれていたようであるが、剥落して不鮮明である。体軀には、中尊同様に肉付きを意識した隈取りが入れられている。姿勢は腰の捻り方が違うことを除けば、右脇侍と同じで、右手は胸前で第一指と第二指を捻じ、左の体側に描かれる蓮華の茎に添えた左手を腰にあてる。右脇侍の描写と異なるのは、顔の眉、鼻筋、首の三道、乳首、耳の形等に、ハイライト的な白線が添えられている点である。

右側の壁（写真 18）には、坐形の菩薩の全図が一体、



写真18 石積み構造物 右側の壁

その右隣に菩薩の光背の一部、さらに菩薩の下方に、菩薩よりやや小ぶりの首から上の尊容の描写が確認できる。正面の壁の右端に、右奥壁の菩薩の光背の一部が描かれており、正面壁と右側の壁の接続が正しいことが確認できる（写真19）。

右側の壁に坐形で描かれる菩薩の顔は中尊とは反対の開口側に向いた四分の三面観であり、体軀は正面を向く。右足は跏趺を崩すような形で、その足先は座面よりも下に位置する一方、座面の上に跏趺した左足は足裏を見せている。正面壁の両脇侍と同様に頭部は高髻を結び、宝冠を身につけ、上半身は首飾、臂釧、腕釧、条帛を身にまとう。肉身の色は、中尊と同じく赤みがあり、隈取りが入れている。右手は肘を曲げて肩の位置まで上げて、内側に向けた第三指、第四指を軽く曲げるような、しなやかな形をとる。左手は胸前で、手のひらを内側に、第一指と第二指を捻じる。裾の色はよくわからないが濃色で、足首くらいまでの丈があると思われる。

目視観察の印象では、記事に述べられた年代（8～9世紀）と近い年代に制作された可能性は十分にあると感じた。その理由は、描写感覚に古典的表現の残像を感じるのと、彩色顔料の色と変色の調子である。この印象は個人的感覚に基づくものであり、十分に検証されたものではないが、絵描きの着眼点として言及しておく。壁画に限らず人の手が創作するものには、時代、社会、風土に影響される事象と、個別の美的感覚によるものが混在する。エンサ・ゴンパの壁画は、作画の密度、上質さを特段に備えた表現とは言えないが、地方色と断定できる独自性や拙さはなく、簡略であるが洗練された表現力が感じられる。この壁画の彩色にみられる印象的な明るく爽快な緑はアタカマイト、中尊の衣の褐色は丹による変



写真19 石積み構造物の内部（三次元データ）

色と推測する。現況の発色から、シルクロード天山北路に所在するキジル石窟壁画のうち7～8世紀に隆盛する第2インド・イラン様式との近似を感じた。立体感を補助するハイライトの白線、細い条帛を白点で表すことなどの共通点も認められる。顔の輪郭、尊容、頭光の形状などはキジル石窟壁画と合致はせず、直接の影響関係を断言することはできないが、中央アジアとヌブラ溪谷との地理関係を考慮すると、人とモノの往来によって色材や美的感覚などの移動・伝播が存在した可能性は十分に考えられよう。

本稿は一次的な解釈を報告するものである。今後、調査で得た撮影画像などを詳細に検討し、美術史や図像学の見解を交えて、ラダックに存在する最初期の仏教壁画表現について検証を進めていきたい。なお、エンサ・ゴンパ裏の山肌には多くの仏塔が存在するが、その他の仏塔には古い壁画は確認できなかった¹⁸。

3. デスキット・ゴンパの壁画

3-1 デスキット・ゴンパ

デスキット地域はシャヨク川とヌブラ川の合流地点にあたり、役所等が所在するヌブラ溪谷の中心集落である。集落の東はずれにあるデスキット・ゴンパ（写真20）は、正式名称を Galdan Tashicholin (dga'ldan.bkra.shis.chos.gling)¹⁹ といい、ティクセ・ゴンパの分院、ヌブラ溪谷のゲルク派の総本山である。1433年に高僧チャンセム・シャーラブ・サンポにより建立された。麓には近年つくられた32mの弥勒菩薩倚坐像が西向いて坐している。デスキット・ゴンパの堂宇は、険しい岩山の中腹から上部に向かって増広されたのか、多層構造になっている。また在籍する僧侶の数も多い。デスキット・ゴンパからシャヨク川の西側が遠くまで見渡すことができ、麓の弥勒菩薩は西方からの侵入に目を光らせているような印象である。デスキット・ゴンパの裏山にある古い壁画の所在に



写真 20 デスキット・ゴンパ遠景

つについては、スカルマ氏の知人から情報を得た。また、デスキット・ゴンパの僧侶に現地への道案内を引き受けていただき、調査が実現した。

3-2 瞑想堂への道

早朝6:30にデスキット・ゴンパ正門を出発し、ゴンパの最奥から裏山を登る。しばらく歩くと、垂直に近い崖に、人一人が通れる程度の道が切り開かれている。崖に張り付くように落石に注意しながら降りる。途中、崖下に移動するための木製の梯子をくだり、谷底へと向かう（写真21）。案内の僧侶がいなければ、先が読めない崖を下ることは不可能であったであろう。二時間ほどで目的地に到着した。溪流沿いに開いた平地に、石積みの小屋が二棟建っていた（写真22）。

石積みの小屋の一つは、方形の平屋で周辺や入口部分が整備されており、近年修繕されたことがわかる。小屋に隣接する平地は、立木と丸太を組んでテラスのように整えられており、煮炊きする竈や、生活道具を保管しているブリキの大きな長持が置かれていた。傍を流れる溪流が美しく、心地のよい清浄感がある。方形の建物の右隣には、別の石積みの平屋がある。内部には二つの部屋が設けられており、竈や寝台など住居空間で用いられた痕跡が残る。この平屋はしばらく使われていないのか、内部は砂や砂利、枯葉で埋もれていた。

方形の建物の入り口は東向き、まるで茶室の躰口のような大きさと低さで設けられており、木製の扉が取り付けられている（写真23）。建物の内部は天井が低いがらんとした空間であり、二人が入ると、相手の動きに気をつかうような狭さである。正面の壁には小さな窓が開口しており、その下に簡易な祭壇が置かれている。壁画は、入口側の壁（写真24）と入って右側の壁（写真25）の二面に残っており、他の壁面は新たにつくられた壁土で覆われている。立地状況と、建物の大きさを考えると、ここ



写真 21 瞑想堂への道



写真 22 崖の上から見た瞑想堂

は僧侶が人里離れた清浄な場所で瞑想の修行をおこなうための場所（以後、瞑想堂）であった可能性が高い。

3-3 瞑想堂の壁画

瞑想堂の壁画は、ラダックの古刹に散見されるインド・ネパール様式に連なるものである。壁全面を水平または区画に割り付けし、一回り大きな尊格が配置され、その周囲には小ぶりの坐仏が規則的に並べられている。一回り大きな尊格は、入口側の壁に五体、入って右側の壁に五体が残存する。入口側の壁には、扉の上に護法尊三体、右下方に金剛薩埵、左下方には持物不明の一面二臂の菩薩形が描かれる。入って右側の壁には右から、仏頂尊勝母、如来形（右手：与願印 左手：禅定印）、如来形（禅定印）、如来形（おそらく転法輪印）が描かれる（一番左の一体は損傷が激しく不明）。壁画上部には、ラダックの



写真 23 瞑想堂入口



写真 26 アルチ寺新堂の内部



写真 24 瞑想堂入口側の壁（三次元データ）



写真 27 サスポール石窟第3窟の内部



写真 25 瞑想堂入って右側の壁

古い壁画によく見られるカーテン (chhukebs) の帯と鷲鳥が列をなす表現が描かれている。この壁画表現に類似した形式は、アルチ・ゴンパの新堂 (写真 26)、アルチ村のトゥジェチェンポ・ゴンパ、サスポール石窟 (写真 27) などに見られる。これらはいずれも 16 世紀以前に制作されたと推定される壁画であり、デスキット・ゴンパ建立時と相応する。

壁画の制作は、壁面を白下地で整え、割り付けをした

後に、尊像等の下描きを行った工程が想定される。そして、岱緒系の土性顔料をはじめとするさまざまな顔料、染料を用いて下描き線の上に単調な彩色を施し、最後に尊像の輪郭を描き起こした作画工程が看取される。線描は硬筆なペンで描いたかのような均一で闊達な線である (写真 28)。近紫外光を照射した際に強い蛍光反応が認められることから、有機系の材料が用いられた可能性も想定される。 (写真 29)

また、入口上部に描かれた一回り大きな三つの尊像のうち、中央の忿怒尊の右下方に「グルゴン」 (写真 30)、向かって右の騎乗の尊像の下方には「レーマティー」 (写真 31) というチベット語の墨書が認められた²⁰。グルゴンは一面二臂のマハーカーラであるクルキ・ゲンボの転訛、レーマティーはベンデン・ラモの別名でサンスクリット語のレーヴァティーの転訛と考えられる。壁画表現をみると、クルキ・ゲンボの特徴的な持物であるトゥルテ・ガンディと呼ばれる棒²¹は描かれていない。レーマティーは尊像部分が欠失しているものの、騎馬像であることは認められる。向かって左の尊像は、持物から四臂マハーカーラと考えられ、これら三体は護法尊として瞑想



写真 28 瞑想堂入口上部の坐仏

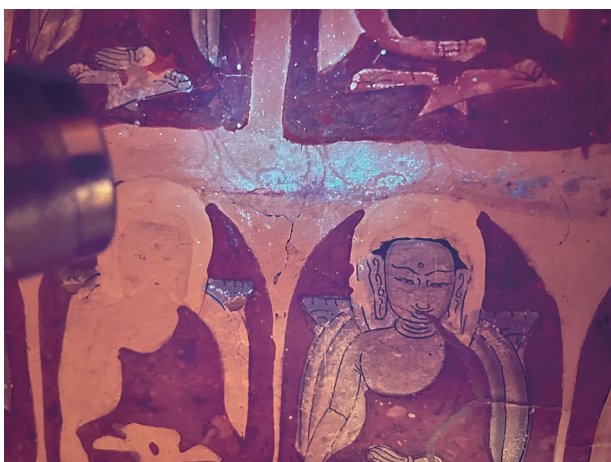


写真 29 近紫外光照射による蛍光反応（瞑想堂入口上部）

堂を守護する目的で配置されたと考えて問題ないであろう。

壁画は全体的に退色が激しく、土性顔料である赤茶色以外の色は、ほとんど退色し、茶褐色または灰褐色を呈している。特徴的な彩色は、入口上部のマハーカーラ、クルキ・グンボの肉身に塗られた青色がわずかに認められる程度である。ラダックの他寺の類例を見ると、建物内の暗所ではここまでの退色は認められない。退色の状況に加え、瞑想堂の壁土や天井の部材の新しさや、周辺の整備状況に鑑みると、瞑想堂は比較的最近に再建されたものと推測される。元々の瞑想堂は経年により崩壊し、長い間、壁画が露出状態になったことで損傷、退色等の劣化が生じたとのだろう。壁画の損傷は残念であるが、補筆などは認められず、創建時に制作された壁画と考えてよいであろう。デスキット・ゴンパ自体は、増築と改築が繰り返されており、創建当初の壁画が残っている可能性は低いと思われ、瞑想堂の壁画は当時おこなわれていた瞑想修行の形態の一端を伝える貴重な存在といえよう。



写真 30 入口門口上部の墨書「グルゴン」



写真 31 入口門口上部の墨書「レーマティー」

おわりに

ヌブラ溪谷で近年確認された比較的古いと考えられる仏教壁画の調査結果について報告した。今後、各種の撮影画像や採寸、色合わせ等の情報をもとに詳細な検証をおこなうとともに、壁画の模写制作などの芸術実践を試みる予定である。

エンサ・ゴンパとデスキット・ゴンパの調査は、現地協力者であるスカルマ氏をはじめ、様々な方の理解と協力が得られたこと、そして、天候等の運にも恵まれたことで実施することができた感動と感謝の念に堪えない。

エンサ・ゴンパの住持は、我々が持参した昼食を取るにあたりドゥカン・サルパの中庭の使用を勧めてくださり、さらにお茶とビスケットを提供して下さった。晴天の空の下で昼食で気力、体力を回復することができた。机の鉢植えに植えられていた植物は藤袴のような花で、葉は肉厚であったことが印象に残っている。

デスキット・ゴンパの裏山から瞑想堂までの行程は険しかった。下見の日は、曇りで時々小雨が降り、足元が滑り危険を感じた。相応の登山技術と体力が求められることから、一時は訪問を諦めざるを得ないと思っていた。しかし、スカルマ氏や、案内してくれた僧侶をはじめ、現



写真 32

地の方々の尽力により調査が実現した。我々が瞑想堂で調査している間、僧侶は瞑想堂の隣のテラスで、火をおこし、溪流の水を沸かして Maggi のインスタントラーメンを調理してくださった(写真 32)。缶のコンデンスミルクで煮出したチャイと共に頂いた温かい朝食は、酸素不足と連日の調査で疲労を感じていた我々の緊張をほぐし、安堵の気持ちで満たした。山間の清浄な空気、溪流と木の葉が奏でる音と光の中での食事と歓談は、忘れ難い経験として深く記憶に刻まれている。

ラダックの仏教寺院壁画の調査は、スカルマ氏の準備と助言、諸々の調整がなければ実現は不可能であった。諸々のご尽力に心から感謝を申し上げる。全員が健やかにワクワクしながら調査を行った経験は何物にも代え難い喜びである。この成果と経験を、どのように研究および芸術実践に活かしていくか、今後の協働における発展を含め期待が増すばかりである。

【謝辞】本現地調査は、(公財) 平和中島財団アジア地域重点学術研究助成、JSPS 科研費 (JP19H01364) によって実施しました。関係者の皆様、心よりお礼申し上げます。

註

- 1 京都市立芸術大学 美術科日本画専攻
- 2 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部
- 3 東京外国語大学大学院 総合国際学研究院
- 4 井上隆雄『チベット密教壁画』(駁々堂、1978 年) p. 237
- 5 大野徹 / 井上隆雄『パガンの仏教壁画』(講談社、1978 年)。「パガン」という地域名は近年、現地の発音に基づき「バガン」と表記されることが多く、本稿でも書名を除きバガンとしている。
- 6 科学研究費助成事業・新学術領域研究 (研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(JP16H06281、中核機関：国立民族学博物館、支援機能：地域研究画像デジタルライブラリ (略称

DiPLAS)) の支援を受けて実施。

- 7 本学芸術資源研究センター重点プロジェクト「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」(2016 年～)を土台に、本学特別研究「井上隆雄写真資料のアーカイブ実践による仏教美術研究ネットワークの構築」(2021 年度、2022 年度)および、(公財) 平和中島財団アジア地域重点学術研究助成「井上隆雄撮影のラダックとパガンの仏教壁画写真に基づく表現研究と芸術実践」(2022 年度)を遂行中である。
- 8 筑波大学人文社会系の谷口陽子准教授から情報を提供いただいた。
- 9 NPO 法人 JULAY LADAKH 代表
- 10 高木辛哉『旅行人ウルトラガイド ラダック』(旅行人、2001 年) p. 74 および p.164-169
- 11 "Good News from Ladakh: from the oldest Buddhist wall painting of the western Himalayas to the first excavation in a funerary cave." Centre de recherche sur les civilisations de l'Asie orientale (2022 年 5 月 25 日)
<https://www.crao.fr/2022/05/25/good-news-from-ladakh-from-the-oldest-buddhist-wall-paintings-of-the-western-himalayas-to-the-first-excavation-in-a-funerary-cave/> (アクセス日時：2022 年 8 月 15 日)
- 12 "A PASSEGE THOROUGH HISTORY:THE ENSA GOMPA" Directorate of Public Relations Ministry of Defence Sannik samachar
<https://sainiksamachar.nic.in/press-release-details/1878> (アクセス日時 2023 年 1 月 7 日)
- 13 前掲註 10 p.79 掲載のエンサ・ゴンパの配置図に基づく。
- 14 彭措朗然『托林寺』(中国大百科全书出版、2010 年) p. 74
- 15 ドゥカン・ヨグマに関する修理報告は以下の通り。
Edoardo Paolo Ferrari "Of earth, stone and wood:the restoration and conservation of a Buddhist temple in Ladakh, Indian Himalayas" Polytechnic University of Valencia Congress, HERITAGE 2022-International conference on Vernacular Heritage: Culture, People and Sustainability (2022 年 9 月 15-17 日)
<http://ocs.editorial.upv.es/index.php/HERITAGE/HERITAGE2022/paper/view/14377> (アクセス日時 2023 年 1 月 7 日)
- 16 □は欠損。観音の梵語表記は Avalokiteśvara
- 17 筑波大学芸術学系の八木春生教授と高野山大学密教学科の菊谷竜太准教授の指摘による。
- 18 現地で正確に数えたわけではないが、撮影した写真を基に確認したところ、エンサ・ゴンパの北約 50m のところに 20 基ほど、南西約 100m のところに 50 基ほどの仏塔が集まっており、周辺に散在しているものを含めると、全部で 100 基を超える仏塔があった。小さいもので高さ 1m 未満、大きなものでは高さ 3m を超えるものもあった。内部空間を有するものもあったが、内部は石積みと多量の粘土製の小塔 (ツァツァ) が確認されるのみで、壁画を見つけることはできなかった。ただ、今回のような壁画が周辺の古塔内部に残されている可能性は十分に考えられ、さらなる調査の必要性を強く感じた。
- 19 前掲註 10 p. 75
- 20 墨書の判読は、現地にてスカルマ氏ご教示いただいた。また、帰国後にチベット仏画絵師のデュブイ操氏に確認いただいた。
- 21 田中公明『チベットの仏たち』(方文堂出版、2009 年) p. 230

【掲載写真について】1, 2, 8, 20, 21, 25 は正垣撮影 (8 は 2006 年撮影)、3, 5, 6, 7, 9, 10, 13, 14, 15, 18, 19, 22, 23, 24, 25, 28, 29, 32 は末森撮影、4, 12, 16, 17, 25, 27, 30, 31 寺井撮影、26 は井上隆雄写真資料、11 は前掲註 14『托林寺』より引用した。

